

## 浅間火山 2009年2月2日噴火の火山灰(速報)

## Preliminary report on Ash-fall during the February 2, 2009 Eruption of Asama Volcano.

# 及川輝樹 [1]; 下司 信夫 [2]; 星住 英夫 [3]; 鬼澤 真也 [2]; 大石 雅之 [4]; 田村 糸子 [5]; 古川 竜太 [6]; 伊藤 順一 [7]; 宮城 磯治 [8]; 石塚 吉浩 [9]; 林崎 涼 [4]

# Teruki Oikawa[1]; Nobuo Geshi[2]; Hideo Hoshizumi[3]; Shin'ya Onizawa[2]; Masayuki Oishi[4]; Itoko Tamura[5]; Ryuta Furukawa[6]; Jun'ichi Itoh[7]; Isoji MIYAGI[8]; Yoshihiro Ishizuka[9]; Ryo Hayashizaki[4]

[1] 産総研・地質情報; [2] 産総研・地質情報; [3] 産総研; [4] 首都大・都市環境・地理; [5] 首都大学東京・都市環境科学研究科; [6] 産総研; [7] 地質調査総合センター; [8] 地調; [9] 産総研、地質情報

[1] AIST, GSJ; [2] GSJ, AIST; [3] GSJ, AIST; [4] Dept. of Geography, Tokyo Metropolitan Univ.; [5] Dep. Geography, Tokyo Metropolitan Univ.; [6] GSJ, AIST; [7] Geological Survey of Japan, AIST; [8] GSJ; [9] Geol. Surv. Japan, AIST

浅間山(2568 m)は2009年2月2日1時51分に噴火し8時頃まで火山灰の放出が続いた。気象庁や報道機関によると、最大噴煙高度は火口縁から2000mにおよび、降灰は遠地では、群馬県安中市、下仁田町、富岡市、甘楽町、藤岡市、埼玉県秩父市、長瀨町、里美町、飯能市、越生町、入間市、上里町、神川町、寄居町、皆野町、ときがわ町、横瀬町、小鹿野町、毛呂山町、東秩父村、東京都あきる野市、青梅市、八王子市、立川市、府中市、調布市、町田市、千代田区、神奈川県横浜市、横須賀市、千葉県君津市、鴨川市、大多喜町の他、羽田空港および大島空港などで確認された。浅間火山の火山灰が都心に降灰したのは2004年9月16-17日の噴火以来である。我々は、群馬県下仁田町、埼玉県秩父市、東京都、神奈川県において2月2-3日に降灰調査を行ったので、ここに予察的な報告をする。降灰から調査中にかけては、晴天で風速も0-2m/sと弱かった。そのため降灰後の移動・再堆積はわずかであったと考えられる。また、1月31日には降雨があり、それ以前の粉塵は洗い流され、火山灰を観察・採集するには好条件であった。

埼玉県、東京都、神奈川県に降灰した火山灰は、明灰色(N7)で細粒砂からシルトサイズの粒度である。わずかに硫黄臭も伴う。乾燥し非粘着質であるが、神奈川県から東京都にかけては車のボンネット上に白くスポット状に降灰している地点が多くみられたので、降灰時はゆるく凝集していたと考えられる。降灰量は埼玉県秩父市で40 g/m<sup>2</sup>、東京都羽村市で15 g/m<sup>2</sup>、府中市南町で2 g/m<sup>2</sup>、八王子市南大沢で0.2 g/m<sup>2</sup>、稲城市坂浜で5 g/m<sup>2</sup>、川崎市生田で0.7 g/m<sup>2</sup>、川崎市麻生で2 g/m<sup>2</sup>、横浜市長津田2 g/m<sup>2</sup>、横浜市保土ヶ谷で2 g/m<sup>2</sup>であり、比較的多量に降灰した地域は秩父市-羽村市-府中市-川崎市麻生-横浜市保土ヶ谷を結ぶ線上で北西から南東を向く。気象庁の発表では、千代田区で降灰されたとされているが、2日中の調査において都区内における降灰は目視で確認できなかった。そのため、降ったとしても極微量である。比較的多量に降灰した地域は、降灰域全体の中軸よりやや西側を通る。アメダスによると、地表付近の風は、房総半島では北東風だがその他は北西風が卓越している。その一方、高層気象台(つくば市館野)の上空では、地表から高度1200m以上は、高度約3900mを境にそれ以上の高層の風が強い北西風でそれ以下の中層の風が西北西風である。噴煙高度および分布とあわせて考えると、噴煙は主に高層の北西風によって火口から南東方向にたなびいたが、そこから降下した火山灰が中層の風でより東側に押しやられたと解釈すれば全体の分布に対して厚層の主軸が西側にずれていることが説明できる。火口からの噴出量は、アイソパックを基に概算すると、およそ2-3万トン程度である。これは速報値であるが、今回の噴火は2004年9月1日噴火(約5万トン:吉本ほか,2005;約20万トン:早川ほか,2006)、1982年4月26日噴火(約8万トン:荒牧・早川,1982)と同程度ないしそれよりやや小さい規模と判断される。

環境省(はなこさん)や横浜市の粉塵・花粉計測システムでは、今回確認した降灰軸に沿った地点で、降灰時刻と推定される時間に計測数が増大した。これら計測システムは、降下火山灰のリアルタイム計測システムとしても使用できる可能性が高い。

なお、学会当日は火山灰のより詳しい記載岩石学的特徴も発表する予定である。

文献:荒牧・早川(1982)火山,27,203-215.早川ほか(2006)地学雑誌,115,149-171.吉本ほか(2005)火山,50,555-566.